



Title	マイノリティを生きるということ、あるいは蝙蝠であるということ
Author(s)	崔, 博憲
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49435">https://hdl.handle.net/11094/49435</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【21】

氏名	さい 博 憲
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 22602 号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	マイノリティを生きるということ、あるいは蝙蝠であるということ
論文審査委員	(主査) 准教授 富山 一郎 (副査) 教授 杉原 達 教授 荻野 美穂

論文内容の要旨

本論文は、「はじめに」と「おわりに」を含め、全五章の構成になっている。内容は、タイの山岳民族の現代史、とりわけ第二次大戦後の戦後史を、長期にわたる綿密なフィールドワークにもとづいて検討したものである。戦後史の中でもとりわけ中心となる時期は、日本や欧米からの資本流入と日本をはじめとするODAによる開発政策により急激な経済成長をなした、1980年代以降である。こうした成長の中で強制移住も含む激しい生活の変容にさらされたタイ北部の山岳民族、とくにアカと呼ばれる人々が、開発政策とどのように交渉しながら生きてきたのかということに、本論文の焦点がある。ま

た本論文において注目すべきは、採用されているフィールドワークの方法である。そこでは、調査者と被調査者という固定的な関係における記述ではなく、他者との出会いが調査者に自己言及的な問いを投げかける契機でもあるという点が、強調されている。このフィールドワークの方法については、第一章、第二章において論じられている。また山岳民族と開発政策の分析は、本論文の中心である第三章においてなされている。以下順に、その要旨を説明する。

第一章では、フランツ・ファンンやガヤトリ・C・スピヴァクらの議論を検討する中で、権力関係の中で「お前は何者か」という問いかけに日常的にさらされる存在として、マイノリティを設定している。そしてこうした権力関係を察知し、この関係を前提にしてなされる自己同定に抗うがゆえに既存の言説の中で定義することが困難なマイノリティの生を、本論文の課題としている。と同時に、こうした課題において採用される記述の理論的枠組みとして、社会学者の新原道信や地域研究者の土屋健治、鶴見良行らの記述の方法を具体的に検討しながら、記述者自身が記述において遂行的に当初の言語秩序からはみだしていくというフィールドワークの方法が、論じられている。

第二章では、第一章の枠組みをふまえながら、タイでのフィールドワークにおいて遂行的に見出されていく調査者自身について、自己言及的に論じられている。すなわち、「お前は何者か」という問いの中で在日韓国・朝鮮人として名指されてきた自らの生を想起しながら、「在日作家」とよばれる李良枝、姜信子、あるいは「親日文学者」として指弾された李光洙の作品を取り上げ、そこに民族や国家にかかわる権力的な自己同定を問題化しつつける記述の可能性を、考察している。また文学作品から引用された「蝙蝠」という言葉を、記述の根拠としての同定不可能性を示す用語として、検討している。こうした第一章と第二章を通じて、タイにおける山岳民族の記述が、同時に記述者である崔氏自身のマイノリティとしての自己言及的な記述と重なり合っていることが、示されている。

第三章では、タイの山岳民族と開発政策の関係を検討している。まず、冷戦期においてロストウにより主張された開発政策と反共国家の合体した発展モデルにより、山岳民族が国民に統合されるべき「内なる他者」として発見されていくことが考察されている。すなわち、山岳民族にとって開発とは、生活の富裕化だけではなく、不断に「お前は何者か」と問い正され、タイ国民への統合が求められていくプロセスだったのである。いわば開発は、権力的な命名と共に展開したのである。さらにこうした構図は、冷戦後においても継続していき。本章では、チェンマイを中心におこった開発に対する山岳民族の抗議活動をとりあげながら、タイ政府だけではなく、開発に関わる NGO や開発人類学者を含む様々な社会的アクターを綿密に検討し、諸アクターの利害が絡み合う中で山岳民族への国民統合が展開していることを、実証的に論じている。また同時に聞き取り調査により、アカの人々が、こうした開発と命名に抗い、交渉しながら、自らの生を切り開こうとしていることを、明かにしている。

#### 論文審査の結果の要旨

調査者と被調査者の権力的な関係性を問題化することにより、両者の背後にある個別社会を横断していく可能性を探るといふ、人類学者のジェームズ・クリフォードやジョージ・マーカスらによって提起されたフィールドワークに関わる論点は、その記述方法の困難さゆえに、たんなる理念的な議論に結

果するか具体的記述においては無視される傾向にある。こうした中であって本論文は、タイの山岳民族との出会いが、マイノリティとしての記述者自身への内省的な問いとして差し出され、それが新たな山岳民族のマイノリティとしての記述に結びついていることを示すことにより、クリフォードらの論点を具体的に前進させている。またこうした記述の中で、フィールド科学とはみなされていなかった文学や思想をはじめとする他領域も含む、総合的な研究方法が提起されている。こうした方法により、開発の中で国民へと統合されようとしているアカの人々が抱える問題や抵抗運動が、決してタイという地域にとどまるものではなく、国家と民族において構成されている近代自体に関わっていることが、明かになった。また同時に、こうした問題の広がりや、近代一般を論じる普遍的枠組みではなく、個別マイノリティたちの生において、具体的に論じられていることも、フィールドワークの可能性として評価できる。

このような長期にわたるフィールドワークにもとづいた斬新な問題設定と研究成果ではあるが、検討すべき課題ものこっている。それは、国民統合と密接にかかわりながら別の展開を遂げる資本への包摂という問題である。人々の生が、労働力商品として包摂されることと国民化とは、重なりと同時に同じではない。また国家と資本の関係性は、地域によって差異があり、決して一様ではない。これらの論点は、開発政策をどう考えるのかということと密接に関係するだろう。またこうした論点を、本論文のいうマイノリティという設定にどのように組み込んでいくのか、またフィールドワークという方法においてどのように具体的に問題化しうるのかということは、今後の大きな課題であると考えられる。

上記の点を課題としてのこしているが、新たな分析の方法や開発にかかわる新たな知見を提示することに成功しており、よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。